

第135回簿記検定試験 1級 出題の意図・講評

[商業簿記]

(出題の意図)

第135回では、決算整理前残高試算表から、期末整理事項等にもとづいて損益勘定と繰越試算表を作成する総合問題を出題しました。問題全体を見渡すと複雑そうに見えますが、一つ一つの取引を確実に処理していけば、解答が導き出せるようになっていきます。総合問題ではありますが、要は個々の取引の処理の積み重ねですので、特定の領域に偏ることなく、万遍なく学習を進めておくことが重要です。また、設問によって若干難易度に差があるため、平易な設問については迅速に処理して正解を導き、その分難易度の高い設問に時間を割り当てるといった、全体的な戦略も必要になってきます。

今回の出題の主要論点は、次のとおりです。

- (1) 割賦販売の処理
- (2) 取戻品の処理
- (3) 貸倒懸念債権に対するキャッシュフロー見積法による貸倒引当金の設定
- (4) セール・アンド・リースバック取引の処理
- (5) 新定率法による減価償却費の計算
- (6) 退職給付費用の計算
- (7) ソフトウェアの償却
- (8) 自己株式の処分と新株の発行が同時に行われた場合の会計処理

(講評)

採点結果は、当初予想していたほど芳しくはありませんでした。ただ、割賦販売取引とセール・アンド・リースバック取引がしっかりと理解されている答案では、他の取引でも着実に正解が導き出されている傾向が高かったのに対して、この両取引が適切に処理されていない答案では、他の取引でも不正解となることが多く、特に平易な取引でのケアレスミスが目立つという、明確な傾向が見られました。

若干ボリュームが多めだったのか、最後までたどり着いていない答案も数多く見受けられましたが、そうした中でもできる取引から手際よく着実に解答を進めていった答案では、それなりに得点を積み重ねることができていたようです。

全体的に見ると、出来・不出来がやや極端に分かれてしまったという印象を持ちましたが、特に結果が芳しくなかった答案では、もう少し注意力と計算力

を身につけていただきたいというものが目立ちました。

[会計学]

(出題の意図)

今回は、会計学の問題にふさわしいように、すべて記述問題としました。

一見して、難しいように感じた受験者もいると思いますが、理論問題は第1問だけで、第2問は計算の基礎をなす仕訳問題、第3問は財務諸表の純資産の部の表示問題です。落ち着いて考えれば、それほど難しいところはないと思いますが、文字を書かなければならないため、そのことだけで自信を無くしてしまう受験者がいたかもしれません。

まず第1問は、1か所ある誤りを見つけて、正しい答えを導けるかという問題です。それほど難しくはないと思います。

第2問は、リースの借り手と貸し手双方の取引開始時の仕訳と、決算時の仕訳を問う問題です。問3は、リース資産についての減損計上に関する問題です。減損損失を計上しなさいという文言がなく、条件から減損計上を導き出さなければならない点で、少々難解かもしれません。

第3問は、個別財務諸表と連結財務諸表における純資産の部の表示に関する問題です。計算問題で、純資産の部について財務諸表の表示が出題される場合がありますが、本問は、それを文章問題として出題したに過ぎません。

いずれにしても、問題をよく読んで、トライしてほしいです。

(講評)

採点の結果は、それほど良くはありませんでした。

まず、第3問は、リースでつまずいた受験者に、点数を与えるために作った問題ですが、ほとんどできていませんでした。財務諸表の表示形式の形で出題されればできるのに、問題にあるように、純資産の部の区分について記述式で出された場合、理論問題と錯覚し、途端に解答できなくなってしまう受験者が多いようです。この機会に、財務諸表の表示について学習しておくことをおすすめします。

第1問については、自己株式、繰延税金資産、貸倒れ、資産除去債務と多岐にわたっている問題ですが、それぞれ基準や適用指針または実務指針を勉強しておけば、それほど難しい問題ではありません。

第2問については、あまり勉強されていないようで、得点もそれほど良くありませんでした。特に、貸し手側の処理が全然理解されていなかったのは、残念です。リースは、借り手しか出ないであろうという意識があるようです。もう一度、リース取引について、学習しておく必要があるでしょう。

[工業簿記]

(出題の意図)

第1問は、費目別計算、製造間接費の差異、仕掛品勘定の理解を問う問題です。問1では、[資料]を活用して直接材料費、直接労務費、製造間接費予定配賦額、製品原価を求められるかが問われています。問2の製造間接費配賦差異は、実際発生額と予定配賦額の差となります。

第2問は、費目別計算のうち、材料費に関する理論問題です。『原価計算基準』からの出題ですが、①、②などは商業簿記にも通じる基本中の基本です。また、取得原価の計算法も基本的な論点です。『原価計算基準』を丸暗記していなくても解けるレベルの問題でした。

第3問は、標準原価計算からの出題です。原価標準と標準原価との違い、標準原価の差異を把握する方法（把握する時点）の違いを理解しているかが問われています。

(講評)

第1問は日商簿記2級レベルの問題にもかかわらず、出来がよくありませんでした。製品については資料から逆算して求められることもあり、そこだけできている人がたくさんいました。第2問も出来がよくありませんでした。語群選択を当たり前と思わず、基本的な用語について学習することが必要です。第3問では原価標準と標準原価の違いを理解していない人が多くいたようです。各概念を理解するとともに、標準原価計算については、その手続き、標準原価の差異を把握する方法（インプット法とアウトプット法）、仕掛品勘定の記帳法（シングル・プラン、パーシャル・プラン、修正パーシャル・プラン）などの論点を学習してください。

[原価計算]

(出題の意図)

第1問は、CVPの基礎的な理解を問う問題です。

第2問は、固定費を増やして変動費率を減少させることが、2つのタイプのリスク、すなわち損益分岐点の売上高が高くなるというリスク、売上高の変動に対し貢献利益および営業利益が金額的に大きく変動するようになるというリスクを増大させるということに対する理解を問う問題です。

第3問は、需要が十分にありフル操業している際に、価格が高いけれど歩留率を大きく向上する材料を使った場合、生産量の増大が図られ、それにより販売量が増加し、売上高が増加するメリットと、高い材料を使うことによる材料

費が増加することのデメリットを勘案して、いずれが有利であるかを判定する問題です。材料の投入量自体は変わらないことがポイントです。古い材料の在庫がある場合、それを使うことのコストを機会原価で評価できるかどうかのポイントです。

(講評)

今回の 1 級原価計算は非常によくできており、満点も相当数ありました。これはたいへん喜ばしいことです。とくに第 1 問、第 2 問、第 3 問の問 1、問 2 については、非常に正答率が高くなりました。逆に、第 3 問の問 3 と問 4 は間違えた人が比較的多く、ここで差がついたといえます。